

# JUNKAN

循環研 Junkan Workers Club  
NPO 法人循環型社会研究会

循環研通信  
No.64  
2022 JAN.

## 榎屋理事が KYOTO 地球環境の殿堂入り

循環研代表 久米谷弘光

2021年11月、循環研理事の榎屋治紀氏（システム技術研究所所長）が「KYOTO 地球環境の殿堂」の第12回殿堂入り者に選ばれました。

「KYOTO 地球環境の殿堂」は、「京都議定書」誕生の地である京都の名のもと、世界で地球環境の保全に多大な貢献をされた方々の功績を讃え、永く後世に伝えるために、KYOTO 地球環境の殿堂運営協議会（構成団体：京都府、京都市、京都商工会議所、環境省など）により、2010年に創設されたものです。

榎屋理事は、1980年「エネルギー耕作型文明（東洋経済）」を発表し、国立環境研究所「地球温暖化対策研究チーム」のアドバイザーを務め、WWF ジャパンと「脱炭素社会へ向けた 2050年エネルギーシナリオ」の作成を行うなど、日本における再生可能エネルギーの普及促進に貢献したとして殿堂入りを果たしました。WWF 気候エネルギーリーダー、元ペルー環境大臣、COP20 議長のマニエル・プルガール・ビダル氏、元パタゴニア CEO

のクリス・トンプキンス氏と同時の殿堂入りです。これまでの殿堂入り者には、今年ノーベル賞を受賞した真鍋淑郎氏をはじめ、レスター・ブラウン、エイモリー・B・ロビンズ、ヴァンダナ・シヴァ、宮協昭、ハーマン・E・デイリー、中村哲、デニス・L・メドウズなど錚々たる著名人が名を連ねています。

(<http://www.pref.kyoto.jp/earth-kyoto/dendo/index.html>)

同じ循環研で活動を共にする我々としても大変誇りに思います。今後とも COP26 でも確認された 1.5℃目標の実現に向けた脱温暖化活動などのご活躍を期待しています。



KYOTO 地球環境の殿堂入りした榎屋理事(循環研のお祝い会で)

- p1 榎屋理事が KYOTO 地球環境の殿堂入り
- p2 「食」の自立化と品質向上は日本の喫緊の課題
- p6 ゴミ CO<sub>2</sub>を出さないコーヒータイム
- p7 マルサスもマルクスも超えて脱資本主義を考える
- p10 環境俳句
- p12 春夏秋冬

- 循環研代表 久米谷弘光
- 循環研理事 江本祐一郎
- 循環研理事 大島浩司
- 循環研代表 久米谷弘光
- 循環研理事 及川陽子
- 風月

## 「食」の自立化と品質向上は日本の喫緊の課題

循環研 理事 江本祐一郎

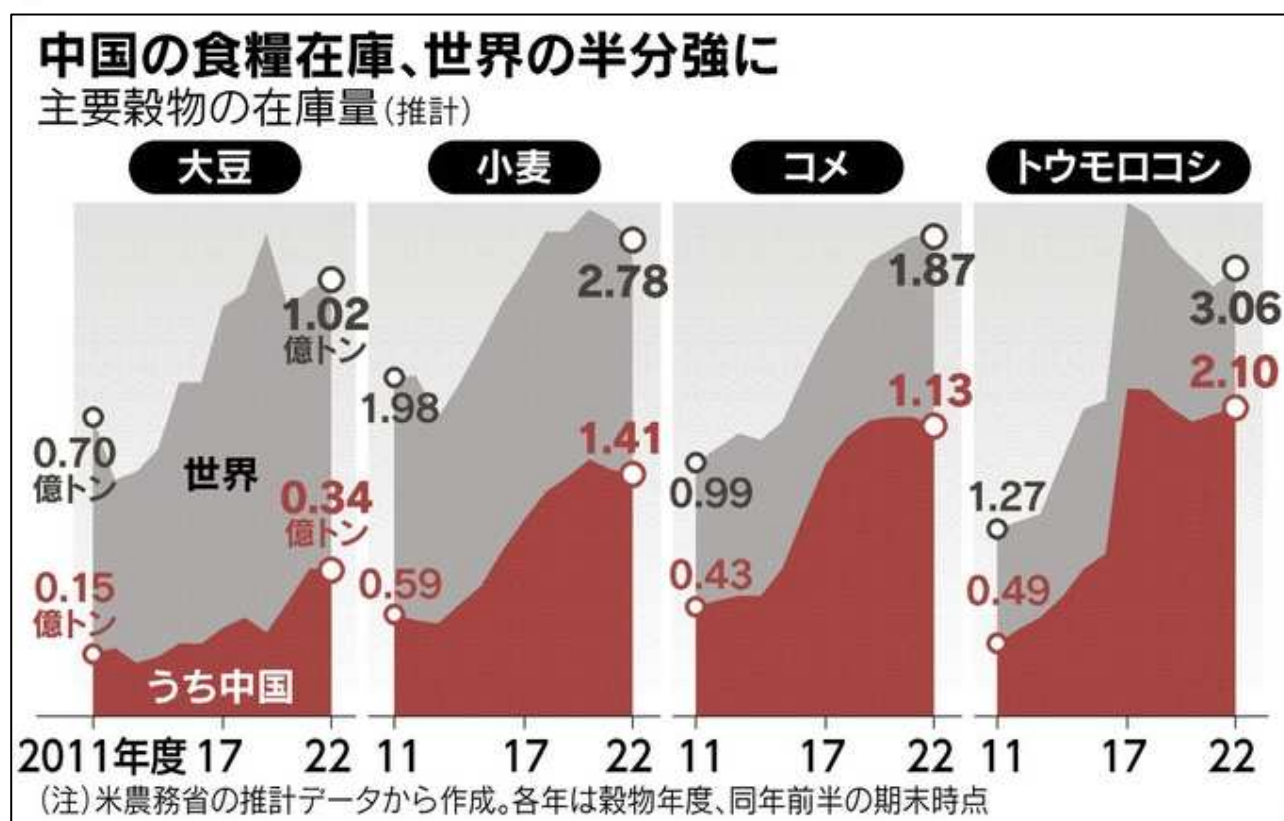
### 中国の食糧在庫、世界の半分強に

今月12月19日の日経一面トップが「中国の食糧在庫、世界の半分強に」だった。中国政府は、食糧自給率が100%を切った今世紀初頭から着々と食料を世界から買い付けている。国家食糧物資備蓄局秦玉雲局長は「中国の食糧在庫総量は歴史的な高水準にある」と自負する。

中国の食糧自給率はFAO（国連食糧農業機関）の食料需給バランス統計から推定すると、2000年以降、低下傾向に転じ、自給率100%を割り込み始めていた。中国は急激な経済成長に伴う人口増加、食生活の多様化、高級化などの要因で、穀物、野菜、畜産物、魚介類

などの農林水産主要67品目合計でその自給率は、2000年95.1%だったのが05年91.7%、10年87.8%と低下。2017年には85.5%となり、17年間で9.6ポイントも落ち込んでいた。

小麦やコメなど主要穀物10品目に絞ると17年間で96.7%から81.3%へと15.4ポイントも大きく低下している。その為、中国政府は着々と食糧の買だめを進めており、気が付いてみると、この日経の図表のように大豆、小麦、コメ、トウモロコシの基本農産物の世界在庫の半分以上を中国が既に買い占めていた。



2021年12月19日 日本経済新聞記事より

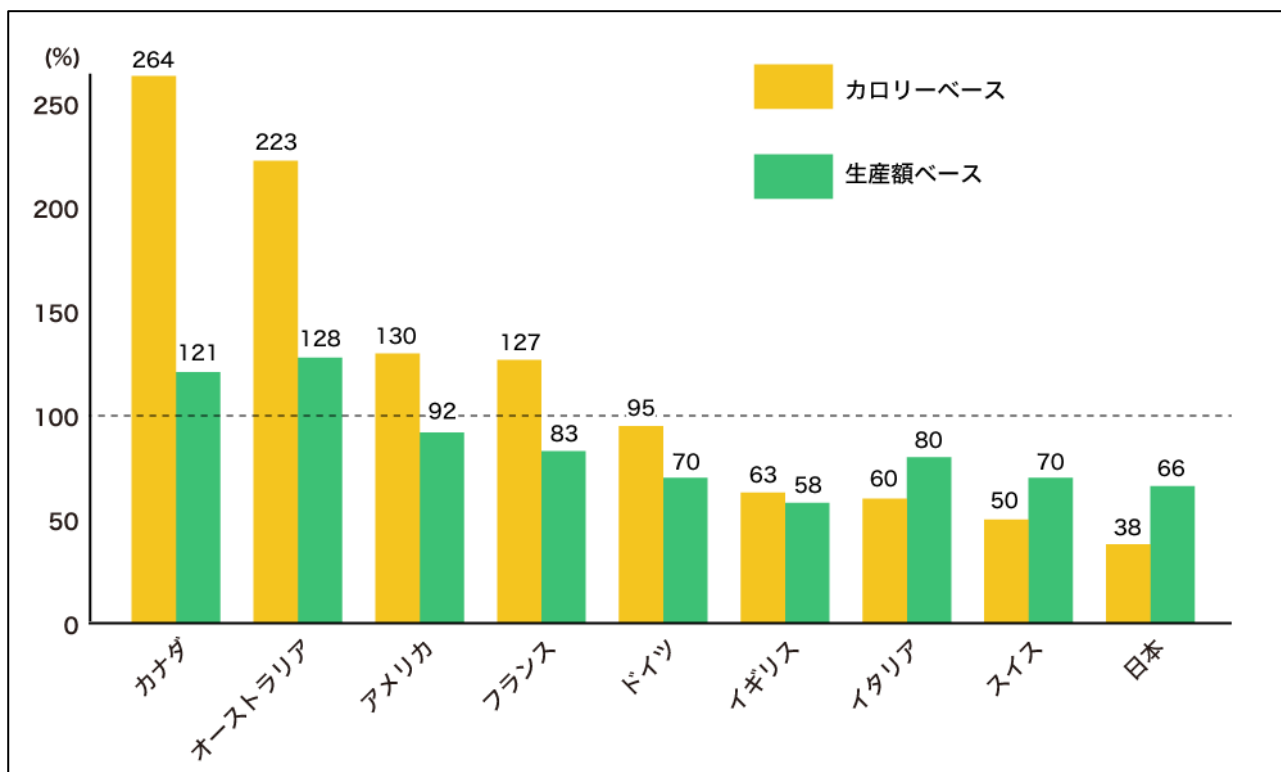
### 日本の主要穀物自給率は僅か 28% (2018 年度農水省)

中国が主要穀物自給率 9 割を切っただけで前述のような食糧買い付けに奔走しているのに日本の 28%はいかにも低い。その 28%の内訳もコメの自給率 97%が大半で、大豆 7%、小麦 13%、トウモロコシ 0% (トウモロコシは年間 500 万トンほど国内生産されるが大半は飼料で統計上 0.0%) しかない。この日本の小麦、大豆などの自給率が極めて低いのは、第二次世界大戦後、食料不足に落ちいった主に欧州の同盟国に食料支援をする為、アメリカが大規模に小麦、大豆、トウモロコシなどの増産に踏み切ったが、1970 年代には欧州の食料事情が回復し、それらの穀物を日本に積極的に輸出する政策に日本が応じてきた結果だ。

食の欧米化、学校給食の普及という日本側にも受け入れ素地があったにせよ、基本農作物の

小麦や大豆のこの殆ど 1 桁の自給率は異常だ。結果、我が国の農業人口は 1960 年には 1,175 万人あったのが 2020 年には 136 万人にまで減少している。

食料自給率の数字には様々あり、農水省は、カロリーベースや生産額ベースで論じる。カロリーベースでは日本は、1960 年代 79%、生産額ベースで 93%もあったが年々下がり続け、2017 年 (平成 29 年農水省公表データ) で、カロリーベース 38%、生産額ベースで 68%と大きく下げている。が、農水省の広報的な見解では、生産額ベース 68%は国際的にみて決して低くないと言う。しかし、本当にそうした見解で本当に良いのか。



資料: 農林水産省『平成 29 年度食料自給率について』より

## 今、世界は 良質な食料をいつまでも安定して安価に輸入できる状況では無くなっている

- 中国の大量な食物買い占め行動は食料の価格上昇に影響を与え、穀物に限らずマグロや牛肉まで様々な食品で日本が買い負ける事態が発生している。
  - 地球温暖化による干ばつや洪水などにより食料大輸出国のオーストラリアや南米アルゼンチンなどでの農業、畜産業の不振が発生しその供給が滞りはじめている。
  - コロナパンデミックによる流通、生産が停滞している。
- などの理由で食料の国際価格は高騰し続けている。国連食糧農業機関（FAO）の食料価格指数はこの11月、1年前より約3割も高騰した。さらに日本は、政府が輸出型製造業重視の円安誘導策を継続している為、日本の食糧輸入価格は化石燃料と同様、輪をかけて高騰している。

## 輸入に頼る食料は必ずしも安全ではなくなっている

日本は、コメだけは97%の高い自給率を保ってきたが、稲作もこの数年、政府がモンサント社など海外食料メジャーの参入をし易くする為の「種子法廃止」「種苗法改正」などなどの法改正を繰り返し、種子の遺伝子情報独占を狙う多国籍外資種子メジャーに渡そうとしている。

日本は伝統的に日本各地で地域の農業生産者と農業試験場が協力して地域風土に合ったコシヒカリなどのような優良品種を全国で300種類も生み出し健全に成長してきた。

しかし、日本の優良な稲作のシステムの破壊を日本政府は止めようとしていない。

この問題は、今年1月の循環研通信 No.60 「種苗法改正」の裏に隠される重大な問題」に述べさせていただいたので是非参照していただきたい。

多国籍種子メジャーによる食糧生産の何が問題かと言うと、彼らは食糧生産を独占化してひたすら利潤の追求を目指す。そのため、植物の種子遺伝子を彼らが販売する農薬だけに耐性を

持たせ、しかも1世代しか実らないF1種子に改造し、独占セット販売を強いる。

そうしたF1種子や農薬が自然生態環境に良い訳がない。農薬も大規模機械化農場で除草の手間を省くための極めて有害な除草剤だったりする。地中の多様な微生物によって育まれる豊かな土壌を破壊し有害な農薬の残留する小麦や大豆、トウモロコシがつくられてしまう。

食糧を輸入に頼っているとそうした安全ではない有害粗悪な食糧しか買えなくなってくる。

現に、アメリカは国内向けには有毒な除草剤「ラウンドアップ」（主成分グリホサート）を使用禁止にしているが、日本向けの農作物には大量に使い続けている。

日本政府は、そうした汚染されたアメリカからの小麦やトウモロコシを輸入するため2017年厚生労働省告示361号で、グリホサートの食物内残留基準値を大幅に引き上げるとい信じ難い行動をとっている。既に日本人の髪の毛からは有意にグリホサートが検出されている。

## 世界は環境負荷を低減した持続可能な農業生産方式として「有機農業」を歓迎している

世界は農薬に汚染され環境を破壊する農業から有機農業へ大きく変化しつつある。環境負荷を低減した持続可能な農業生産方式として「有機農業」を推奨し、消費者も歓迎している。

EUの有機農地は、2019年までの10年間で70%以上増加し、その市場規模は343億ユーロ（4兆1,160億円）にまで成長している。この傾向は全世界に広がりつつある。

一方で、日本政府の打ち出す農林水産業強化戦略は、基本農作物である小麦、大豆、トウモロコシだけでなく、稲作までも蔑ろにしているのに、「霜降り和牛」や「ブランドイチゴ」などの高額農畜産物の輸出振興策だ。

その農林水産省の輸出力強化戦略のポイント表には ・日本産の「品質の良さ」を世界に伝える、 ・「ライバルに負けない」戦略的販売、 ・既存の規制を見直し、国内卸売市場を輸出拠点へ」などしか謳われておらず、世界が食料に求める環境負荷の少ない持続可能な「有機農業」

### 「ゲノム編集」食物の非表示問題

最近の日本の憂慮すべき動向で「ゲノム編集」されたトマトの苗を小学校や福祉施設に配布して「ゲノム編集」に対する市民の抵抗感をなくすような企てが始まっている。ゲノム編集農作物を普及させたい多国籍農化学会社は、「ゲノム編集」は、単に遺伝子の一部であるゲノムを切断し、人為的に突然変異を起こさせることにより、その生物、植物の元からある性質を変化させる技術に過ぎず自然界で起きている突然変

や遺伝子操作種子の農作物への懸念などについて全く触れられていない。

食糧輸出国タイが、モンサント社の除草剤「ラウンドアップ」の使用禁止を農民の反対を押し切って敢行したのは輸出先の EU 諸国などがそうした有害農薬の残留がない作物しか買ってくれないことを理解したからだ。

「食」に対する世界の趨勢を無視して、環境負荷の大きい霜降り和牛や残留農薬の懸念が残る日本の農畜産物が本当に世界に受け入れられるのかという視点が欠如している。

異と変わらない。別の生物から取りだした遺伝子を導入して細胞に新たな性質を付け加える

「遺伝子組み換え」とは異なる。と「ゲノム編集」食物は安全だと言い食品表示義務をなくすことを日本政府に認めさせている。

しかし、この「ゲノム編集」食物を人が食べ続けて本当に安全なのかはまだ十分な知見も結論も出ておらず、当然、欧州も中国も「表示義務」があり、規制がある。

### 日本は「食」の自立化と安全性、品質について真剣に見直さなければならない

有害農薬問題、ゲノム編集問題もクリアしない日本の農畜産物が海外マーケットで今後、受け入れられてゆくと考えるのは甘いと言わざるを得ない。

日本は、肝心の主要基本農産物の国内自給が輸入に頼る状況で、海外富裕層向けの高額ブランド製品の輸出振興に力を入れるなど本末転倒も甚だしい。

EU 諸国の農畜産物の主流が有機栽培で良質でしかも価格競争力が保っているのは各国政府

が生産者に支援金を支払ってでも大切に育成しているからである。

地球環境の急激な変換、有事の発生により「食」の安定供給が脅かされる危険性が増している。

「食」が破綻すれば国家安全保障もままならない。

日本はあまりにも無神経に真逆の方向に走っているのではないか。

## ゴミ CO2 を出さないコーヒータイム

循環研理事 大島浩司

子供のころ豆腐売りのラッパの音に導かれボウルをもって買いに行っていた事を思い出します。当時はプラ容器などなく、食品は未包装で売られていました。

牛乳も瓶で配達され、中身を飲んだ後はきれいに洗って、翌日の朝に回収されていました。

高度成長期にプラスチック容器が開発されたおかげで、何も持たなくてもあらゆる食品、商品が購入できるようになりました。便利でよくなった反面、廃棄されるプラスチック容器が膨大になりすぎ毎年 800 万トンものプラスチックが海に捨てられているとの事です。

そのうち魚よりプラスチック容器の方が多くなるのではとの危機感もあります。

さあ、SDGs 14 番の解決策はあるのか？

プラスチック容器を減らしたいが、物を買えばもれなくプラスチック容器が付いてくる時代、大量生産—大量消費—大量廃棄を見直し、適量生産—適量消費を目指し、声を上げる事が必要なんだと思います。

どうしても消費しなくてはならないところには、

昔ながらの容器持ち込み「量り売り」が必要と考え、次の取組を始めました。私の趣向品の一つにコーヒーがありますが、一切のゴミを出さないことを目指しています。またお湯を沸かすエネルギーも CO<sub>2</sub> 出す電気やガスをなるべく使わないようにしています。

まずコーヒーは友人の焙煎店に行きマイキャニスターを持って買います。包装用の袋無しです。ポータブルコーヒーメーカーはステンレスフィルターですから紙ごみ無しです。お湯は携帯用太陽熱温水器「エコ作」で沸かします。この「エコ作」晴天時 500ML のお水が 1 時間で沸騰します。CO<sub>2</sub> 排出ゼロです。コーヒーの出し殻は太陽熱で乾燥させれば、ゴミでなくシューズ BOX 等の脱臭剤になります。

このようにゴミが出るのが当たり前だった現実を、一つ一つ見つめなおすことで循環型社会に繋がるのかと思う今日このごろです。

次はプラスチック容器ではありませんが、大量に排出していたワンウェイ瓶を何とかしたいと思い、ワインの量り売りにチャレンジします。

ゴミを出さないコーヒータイム

コーヒー焙煎店に行きマイキャニスターを持って買うから包装用の袋無し。ポータブルコーヒーメーカーはステンレスフィルターですから紙ごみ無し





お湯は携帯用太陽熱温水器「エコ作」で沸かします。この「エコ作」晴天時500MLのお水が1時間で沸騰します。

## マルサスもマルクスも超えて脱資本主義を考える

循環研代表 久米谷 弘光

### 神戸大における『人新世の「資本論」』批判

斎藤幸平著『人新世の「資本論」』はすでに40万部超のベストセラーになっている。循環研では昨年3月に読書会を2回にわたって開催したが、神戸大学大学院人間発達環境学研究科では、経済学、社会政策、開発学、人文地理学、社会学と多様な専門領域の大学教員6名が5月～7月にかけて6回にわたって読書会を実施したという。その読書会の成果は神戸大の紀要論文として来年3月に発表されるそうだが、そのまとめ役を担った浅野慎一教授（社会学、マルクス研究者）に昨年末12月2日に一足早くその評価や批判点について循環研セミナー（リモート開催）で話を伺った。その内容は、予想以上に厳しい批判的なものだった。

浅野氏が「あえていえば」と同書の評価したのは2点だけ、①地球環境の保全は資本主義の枠内では不可能であり、人類の生存を持続可能にするには資本主義の超克が不可欠。ゆえに資本主義の枠内での環境保全を唱えるグリーン・ニューディール、SDGsや「新しい資本主義」は、危機を隠蔽する「アヘン」であると指摘したこと。②現代の一部の「マルクス主義」に見られるグローバルな視点の喪失、中核諸国の「大きな政府」の財政出動によって問題の「国民的」解決と「選挙主義（議会制民主主義・国民主権至上主義）」に陥っていることを批判し、グローバルな民衆の主体的実践、協働を重視していること。これらは妥当としながら、一方で多くの重大な、しかもマルクス主義理解の根幹に関わる問題があると指摘している。

浅野氏の批判点を要約すると、次の5点である。

#### ① 「人新世」という時代認識の弊害・誤謬

「人新世」という時代認識は、人間による自然改造を憂慮しているかに見えるが、実際は人間による自然支配を過小評価しており、気候変動至上

主義に陥って人間の生命－生活や主体性を軽視している。

#### ② 剰余価値説を事実上否定

斎藤氏は『資本論』の根幹ともいえる剰余価値説やその前提となる労働価値説を事実上否定し、生産力の発展（＝剰余生産物・剰余価値の生産）を資本主義に固有の資本蓄積・利潤増殖と同一視している。

#### ③ 自然と人間の関係をめぐる典型的な新マルサス主義

「地球は有限」、環境の限界が経済成長の限界、「もはや外部化できなくなる」限界が近づいている。世界的な「脱成長」、特に「先進」国的なライフ・スタイルの見直しの必要性を主張するのは1970年代～1990年代のローマクラブ等、新マルサス主義のそれとほぼ同じ。晩年のマルクスが「生産力至上主義」を克服して「脱成長論」に到達したという独特のマルクス「解釈（＝誤読）」に基づき、「脱成長」のためには資本主義の超克が不可欠との主張を新マルサス主義に強引に「接ぎ木」。「有限の自然」や「脱成長論」といった新マルサス主義的認識：それ自体、人間が自然の限界を認識・制御可能とみなす生産力至上主義に陥っていることに無自覚である。

#### ④ 晩年のマルクスの思想転換をめぐる荒唐無稽な解釈

晩年（1867年以降）のマルクスが歴史社会認識の大転換、すなわち世界資本主義システム（帝国主義・植民地支配、グローバルな中核－周辺構造）の認識に到達したのは、斎藤が指摘するまでもなく、周知の事実。ただし、それは一国単位の単線的な進歩史観を克服したのであって、斎藤氏のいう「生産力至上主義」の克服ではない。晩年のマルクスが自らのオリエンタリズムを克服した

ことが、MEGAの新資料研究で明らかになった成果としているが、これは「ザスーリチへの手紙」も含め、旧MEGAの研究の範囲内で既に十分に論じられてきた知見。斎藤氏は、世界資本主義システムに対する認識も希薄で、依然としてグローバル・ノースを発展した生産力・経済成長の担い手と認識している。

#### ⑤ 恣意性・非論理性・ポスト真実の自己主張

『資本論』でのグアノ（海鳥の糞の化石からなる肥料）や「必然性の国と自由の国」論、ブレイヴァマンが唱えた「構想と実行の分離」、「感情労働」の記述、「脱成長 Kommunismus」を含む四つの未来の選択肢などの論理展開に恣意性・非論理性・ポスト真実の自己主張（＝理論的論争以前の問題）がある。

#### 生産力至上主義批判をめぐって

2℃上昇でも過酷なデストピアが予想される一般の気候－生態系の危機に際してマルクス主義の視点からどんなビジョンが提示されるかに興味があつて『人新世の「資本論」』を手にした私には、正直なところ、斎藤氏の「脱成長 Kommunismus」の提言も浅野氏の批判も期待外れであつた。気候－生態系危機を乗り越え、その危機を加速してきた資本主義を超克するビジョンや道筋が示されておらず、そうしたビジョンや道筋についての批判ではなかったからである。

とはいえ、上記の批判点の内②の剰余価値をもたらず生産力の発展、③の新マルサス主義批判は、マルクス主義の本質的な論点として興味深いものがある。

すべての価値の源泉は人間の労働であり、自己の労働力の再生産に必要な価値以上の価値（＝剰余価値）を生産することができる。これが、人類の生産力発展の源泉であり、人類社会発展の基盤・根拠である。しかし、剰余価値は階級社会の下では、支配階級によって搾取される。これは、資本主義社会に固有の現象ではない。資本主義の、それ以外の階級社会に比べての固有性は、剰余価

値を利潤という形で資本家が取得、利潤の最大化それ自体を至上目的とする点のみだと浅野氏は指摘する。

剰余価値生産が人類社会発展の不可欠の条件・基盤であることは資本主義下でも何ら変わらない。それが疎外された形で——生産力が破壊力として——立ち現れる点も、他の階級社会と同じ。ゆえに、階級一般の廃止（＝生産手段の共有）＝剰余価値の人類の共同利益に沿った活用には不可欠だとしている。

しかし斎藤氏は剰余価値説を否定し、生産力の発展（＝剰余生産物・剰余価値の生産）を資本主義に固有の資本蓄積・利潤増殖と同一視している。資本主義的生産様式の問題は剰余価値の搾取ではなく、「帝国的生活様式」や経済成長一般の問題と見なし、階級問題ではなく地域問題（グローバル・サウス／ノース、「外部化社会」として論じる。そして、資本が人間の労働力を搾取するだけでなく、「地球環境・自然をも収奪」していると述べ、『資本論』以前のマルクスを「生産力至上主義」と批判している。一方では、生産力発展の積極的意義を否定した「脱成長論」、他方では、前近代・周辺共同体社会における階級的矛盾を軽視したコモンの賛美。マルクスとはまったく異なる認識を生み出すのは当然だとしている。また、斎藤氏は、一方で1970年代頃の生産力・経済水準に戻すことが必要、他方で新たな開放的技術の開発は重要だとしているが、新たな開放的技術の開発はいうまでもなく生産力の発展にほかならないとしている。

生産力と生産関係の矛盾に社会変革の契機を見出すマルクス主義にとって、生産力の発展を否定することは変革の契機すら失うことになる。斎藤氏の晩年のマルクスが「生産力至上主義」を克服して、「脱成長論」に到達したとする解釈は、同じマルクス研究者の浅野氏には荒唐無稽としか思えないのだろう。

もちろんここで言う「生産力の発展」は、生産



の拡大や経済成長、GDP や株価の上昇ではない。浅野氏は循環研セミナーでの「生産力の発展」の本質的意味は何かとの質問に答えて、『「生産力の発展」とは、自由の拡大です。人間の潜在能力の顕在化・発達です。欲望の拡大（「欲望を捨てたい」という欲望を含む）でもあります。』と答えている。また、『生産力は疎外された形で現れれば、つねに破壊力でもあります。核兵器も原発も疎外された生産力です。』とも答えている。

### マルサス主義批判をめぐって

一方、浅野氏が1970年代～1990年代のローマクラブの「成長の限界」等の研究成果を「新マルサス主義」だとして切り捨てている点には異論がある。

マルクス、エンゲルスのマルサス批判をトラウマとするマルクス主義者は人口増による貧困や飢餓の現実、地球の環境容量を超える経済成長の限界を認めまいとするようだ。浅野氏も「自然は無限」だと荒唐無稽な論理を展開する。有限な人間が自然の一部だといっているがである。

確かに200年以上前のマルサスの人口論は、食糧は算術級数的にしか増加しないのに人口は幾何級数的に増加するため、人口を制御するには戦争、疾病、飢餓なども必要とし、資本主義のもとでの貧困の原因を自然的要因や労働者自身のせいにする反動的な学説であった。これに対してマルクスやエンゲルスが徹底的に批判を浴びせたのはわかる。しかし、ドネラ・H・メドゥズとデニス・L・メドゥズ、ヨルゲン・ランダースなどローマクラブの主要メンバーが提示し続けた「成長の限界」シナリオの動機や目的には、無限の成長を追い求める資本主義経済への警告があった。

浅野氏は1970年代～1990年代としているので、1972年に100年以内に破局が来ると予測したローマクラブ「人類の危機」レポート「成長の限界」と、20年後の1992年に、すでにオーバーシュートしていると指摘した「限界を超えて生きるための選択」を指して新マルサス主義と批判して

いるのだろう。しかし、その後も彼らは、警鐘を鳴らし続けている。「成長の限界」のコンピュータ・モデル「ワールド3」にその後30年間のデータを投入し、アップデートされた結果が発表されたのが「成長の限界 人類の選択」である。出版されたのは2004年。残念ながら、「成長の限界」の主著者ドネラ・H・メドゥズは2001年に逝去している。「生活の豊かさ指数(HWI)」と「人類のエコロジカル・フットプリント」もこの成果である。「成長の限界」から40年後の2012年には、ヨルゲン・ランダースが今後40年のグローバル予測という副題のついた「2052」を上梓した。ここで、本当の試練は21世紀後半に「成長の限界」のシナリオのひとつ、地球温暖化という汚染に適応を迫られるものになると予測した。そして、現在、われわれは気候危機、気候非常事態の最中にいる。

「2052」には専門家の予測としてハーマン・デイリーが登場する。彼は、「私たちは過去40年で成長の限界に達したが、それを故意に否定した。その結果、大半の人は深刻な害を被ったが、成長というイデオロギーの旗を振る一握りのエリートだけは得をした。なぜなら彼らは、成長がもたらす恩恵を私物化し、それがもたらすさらに大きなコストを社会に押し付けたからだ。」と指摘する。そして、「これから40年間で私たちがついに経済成長の限界を認め、それに適応できることを私は望んでいる。この場合、適応とは、成長経済から定常状態の経済に移行することを意味する。」としている。「脱成長」すなわち「定常経済への移行」は気候変動や生物多様性の危機に備える世界の前線に立つ研究者においては目指すべきポスト資本主義のひとつのビジョンとしてすでに共有されている。

2℃の気温上昇で海洋生態系の基盤であるサンゴが全滅し、陸域生態系にも海面上昇や自然災害、感染症等の破局的な被害が及ぶという気候危機に直面しているいま、必要なのは資本主義経済の成

長ではなく、人類社会の発展である。無限の利潤、経済成長を求めて環境を破壊しつづける資本主義という最後の階級社会は早期に終焉させる必要がある。疎外された生産力による成長を放棄するという脱成長を進めながら、人類社会の発展に真につながる生産力の発展を図る必要がある。

生産力至上主義批判とマルサス主義批判の壁やトラウマを超えて、連帯したマルクス主義者たちが脱資本主義のビジョンとそこに至る道筋の議論を早期に進めてもらいたい。

### 新しい資本主義をめぐって

『人新世の「資本論」』の読書会の後、循環研でも新しい資本主義の議論が高まった。ひとつはESG投資が拡大する中で、IIRCの「国際統合報告書フレームワーク」のように、財務資本や製造資本だけでなく知的資本、人的資本、社会・関係資本、自然資本を資本概念に組み入れて管理していこうという「多資本基盤型資本主義」。もうひとつは広く大衆が株式を持ち、企業を株主や経営陣だけでなく、顧客、従業員、取引先、地域社会、政府、NGO等広くマルチステークホルダーで管理していく「ステークホルダー資本主義」である。

浅野氏は、「多資本基盤型資本主義」対しては、資本は利潤増殖の手段であり、知・人・社会・関係・自然も単なる利潤増殖の手段にしてしまおうとしているのかと疑問を呈している。資本の人間に対する支配が一層強固になり、人間社会の矛盾も一層深刻になるのではないかとしている。また、「ステークホルダー資本主義」に対しては、世界中の人にタダで株式を平等に配分でもしなければ、広く大衆が株式をもつことなどできない。名乗りをあげれば誰でもステークホルダーになれるというのでなければ、マルチステークホルダーによる管理もできない。たとえそれが実現できても「名乗りを上げられない弱者」の声は封殺されることになるのではないかとしている。むしろ、資本家でもないのにそれほど「資本」や「私的所有形態」に拘る必要はないのではないかとしている。現在

(株式会社、資本、利潤等)の枠内・延長上に理想の(具体的な)未来状況を展望したがるのは、戦後日本の高度経済成長世代の一種の性癖ではないかとも指摘していた。

筆者自身としては、とりあえず資本主義経済をよりましたものにするすれば、まずは法人税、所得税の累進性を高め格差是正の再分配を図り、人間の生命・生活や環境破壊につながる疎外された生産、需給への規制を強化することが早道と考える。

### 脱成長や脱資本主義のビジョン

斎藤氏は2020年9月『人新世の「資本論」』執筆の後、セルジュ・ラトゥーシュの『脱成長』(中野佳裕訳 白水社文庫クセジュ)の推薦文を書き、ヨルゴス・カリスらの『なぜ、脱成長なのか』(NHK出版)の解説文を書いている。

セルジュ・ラトゥーシュの『脱成長』は、具体的なユートピアとしての脱成長社会を8つの再生産プログラムの好循環の形をとる脱生産力至上主義の社会、また、「節度ある豊かな社会」とも言い換えている。8つの再生産プログラムとは、再評価、再概念化、再構造化、再ローカリゼーション、再分配、削減、再利用、リサイクルの8つの「R」で表現される。また、脱成長を人口問題に還元するは誤解だとして、予測される文明崩壊の主犯格は人口爆発ではなく、生産力至上主義の爆弾であるとしている。

ヨルゴス・カリスらの『なぜ、脱成長なのか』では、ウェルビーイングを重視した低負荷の社会を切り拓く5つの改革が提起されている。

- 改革1 成長なきグリーン・ニューディール政策
- 改革2 所得とサービスの保証——ユニバーサル・ベーシックインカム、ユニバーサル・ベーシックサービス、ユニバーサル・ケアインカム
- 改革3 コモンズの復権
- 改革4 労働時間の削減
- 改革5 環境と平等のための公的支出

この2つのビジョンは「脱成長」ではあるが、「脱資本主義」とは言い難い。つまり最後の階級社会としての資本主義の本質的特徴である①資本の価値増殖の論理の貫徹、②資本蓄積による収奪、③資本－賃労働関係による搾取、④帝国主義による戦争や植民地支配がこのビジョンによって超越、克服できるとは考えにくい。浅野氏は近代社会の本質的特徴であるこうした「資本主義的階級」要素の止揚のほかに、「国民国家」「能力主義」の止揚も必要と主張している。長く中国残留孤児など移民問題を研究し続けてきた浅野氏には、いまや「国民国家」が移民や難民等の基本的人権を侵害し、社会的弱者を能力が足りないからと切り捨て

る自己責任論が横行しているとの認識があるからだろう。

「脱資本主義」のビジョンとしては、米国のマルクス経済地理学者、デヴィッド・ハーヴェイが『資本主義の終焉』（2017年 作品社）で示した次の17項目がとりあえず検討に値するのではないかと思う。

翻訳が少しわかりにくかったので筆者が【 】内に簡単なタイトルを加えた。前述の「脱成長」のビジョンと比べても「資本主義的階級」要素の止揚についての強弱はあれ、非常に親和性が高いと思われる。

### デヴィッド・ハーヴェイの反資本主義的政治的実践の方向

1. 【住宅、教育、食料等の直接供給】優先させるべきは、適切な使用価値(住宅、教育、食料安全保障など)を、利潤極大化のために市場システムを通じて供給することではなく、それらをすべての人々に対して直接的に供給することである。市場システムの場合、少数の私人の手に交換価値が集中され、支払い能力に基づいて財が配分されてしまうからである。
2. 【私的貨幣蓄積の制限・排除】財やサービスの流通を円滑にする交換手段が創設される。ただし私的個人が社会的権力の一形態として貨幣を蓄積できる可能性は制限されるか排除される。
3. 【コモンレジーム】私的所有権と国家権力との対立関係は、可能な限り共同権レジームに取り換えられる。-そこでは人間の知識と土地が特に、人々がもっている最も決定的な共同のものとして重視される。-その創出や管理や保全是、人民会議ポピュラーアセンブリーと人民連合体ポピュラーアソシエーションにゆだねられる。
4. 【私人の社会的権力領有禁止】私人が社会的権力を領有することは、経済的・社会的制限によって禁じられるだけでなく、病理的な逸脱行為として普遍的に嫌厭される。
5. 【連合生産】資本と労働との階級対立は、連合した生産者たちに解消される。彼らは、共同の社会的必要を満たすことに関して、自分たち以外の諸連合体と協力するとともに、どのように、何を、いつ生産するのかを自由に決定する。
6. 【スピードダウン】日常生活は速度を落とし-移動はのんびりとし余裕のあるものになるだろう-、自由な活動のための時間を極大化させることになる。こうした活動は安定的でよく管理された環境で生まれ、創造的破壊という劇的な出来事から守られることになる。
7. 【社会的必要の相互評価】連合した諸集団は、共通の社会的必要を互いに評価し伝えあうことによって、生産を決定する際の基盤を形づくる(さしあたり実現への配慮が生産の決定に対して影響を及ぼす)。
8. 【社会的労働負荷と生態学的負荷の縮小】新しい技術や組織形態が作りだされるが、それは、社会的労働の負担を軽減させ、技術的分業における不要な区別を解消し、自由な個人的な活動や集団的活動のために時間を解放し、人間の諸活動の生態学的負荷を小さくすることになる。
9. 【専門家による支配からの解放】技術的分業は、オートメーション化、ロボット化、人工知能などの使用

を通じて、その範囲を狭めることになる。絶対必要と思われる残余の技術的分業は可能な限り、社会的分業から切り離される。管理、指導、治安維持のための職務は、全住民のなかの個々人の持ちまわりになるべきである。われわれは専門家による支配から解放される。

10. 【人民連合体による生産手段の独占】生産手段の使用に対する中央集権的な独占力は、人民連合体に帰属する。この連合体を通じて、さまざまな個人や社会的諸集団の分散された競争的能力が動員されるため、技術、社会、文化、そして生活様式におけるイノベーションに差異がもたらされる。
11. 【最大多様化と共通問題への対処】生活様式、存在様式、社会的諸関係、自然との関係、そして文化的習慣や信念は、さまざまな領土的連合体、共同体、共同事業体の中において最大限多様化される。諸個人が地理的に-各領土のなかを、また共同体間を-自由かつ無制約に。ただし穏やかに移動することは保障される。各連合体の代表者たちは定期的に集まりを持ち、共通の職務の評価や計画や実行を進めたり。さまざまな規模-生命地域的な規模、大陸的規模、そしてグローバルな規模-での共通問題に対処したりする。
12. 【不平等の廃絶】「個々人や集団のその能力に応じて」から「個々人や集団のその必要に応じて」までの範囲内という原則において必要とされる以外、物質的供給におけるあらゆる不平等は廃絶される。
13. 【疎外のない非貨幣的な社会的労働】遠く離れた他人のために行われる必要労働と、自己や世帯や共同体の再生産のためになされる仕事との区別はしだいに消え去る。その結果、社会的労働は、世帯内労働や共同作業に埋め込まれたものになり、世帯内労働や共同作業は疎外のない非貨幣的な社会的労働の基本形態になる。
14. 【欠乏からの自由】すべての人々は、教育、医療、住宅、食料安全保障、生活必需品、そして運輸交通に対する自由なアクセスについて平等な権利を付与される。それによって、すべての人々は欠乏から自由となり、行動と運動を自由に行う物質的基盤を保障される。
15. 【ゼロ経済成長と人間的能力や人間力の発展】経済はゼロ成長に（ただし、地理的不均等発展の余地を残して）収斂する。この世界において優勢となる社会規範は、個人的かつ集団的な人間的能力や人間力を最大限発展させることであり、新しさを果てしなく求め続けることである。結果として、永続的な複利的成長への熱狂は駆逐される。
16. 【自然との調和】人間の必要のために自然諸力を領有し生産することは急速に進めなければならない。だが、それと同時に生態系の保全は最大限尊重されなければならないし、栄養素やエネルギーや物質の再生利用がその産出地に対して最大限留意されなければならないし、また自然界の美しさに引きつけられる圧倒的な感性も回復されなければならない。われわれは自然界の一部であり、その活動を通じて自然界の一因になりうるし、実際、そうなのである。
17. 【疎外なき「善き生」と社会的世界の発展】疎外なき人間存在、疎外なき創造的人格が自己や集団に対する、新たな確信を抱きながら生まれつつある。自由に交わりを結ぶ親密な社会的諸関係を経験することから、そして異なる生活様式や生産様式に共感することから、一つの世界が出現している。それは「善き生」の適切な規定をめぐって衝突が繰り返されつつも、すべての人々が等しく尊厳と尊重に値すると見なされる世界である。この社会的世界は、人間的能力と人間力の永続的かつ継続的な革命を通じて不断に発展するだろう。新しさが果てしなく求められつつける。

ハーヴェイは、資本は最終的にそれ自体の内的諸矛盾によって崩壊するという資本主義の「自動崩壊論」を否定している。資本は、さまざまな危機、環境危機に際しても惨事便乗型資本主義によって永続しうるかも知れない。だからハーヴェイは人間生活の再生産と資本の機能にとって「危

険な諸矛盾」をそのまま「致命的」な諸矛盾と名付けるのは差し控えている。資本にとって「致命的」になるのは、資本を止める人間の政治的实践であって、資本の活動そのものではない。多様な反資本主義の革命運動が出現することによって、終わりなき資本蓄積が命じる発展経路が変

わり、このことが資本にとって「致命的」な事態になるとしている。

### 資本主義の終焉に向けて

循環研セミナーでの「資本主義の終焉」や「資本主義の超克」と考える状況を具体的に教えてほしいとの質問に浅野氏は次のように回答している。『イノベーションではないリボリューション、パラダイムシフトには具体的なモデルはありません。なぜなら、新たなパラダイムにおいては、既存のあらゆる概念が意味を失い、または意味が変わるからです。あえていえば、近代社会の3つの本質的特徴である「国民国家」「資本主義的階級」「能力主義」の止揚ではないでしょうか。

ポスト資本主義が理想の社会とは限りません。むしろ一層厳しい社会かもしれません。マルクスがこんな趣旨のことを言っています。子どもはいつか大人になる。それでも子供であることに拘るなら、それは「子供じみる」だけ。大人になることが幸福とは限らない。

理想の調和的な未来をいくら空想的に緻密にプランニングしても、それは実現しません。未来は、今・ここでの矛盾と闘うことによって予想もしなかった形で切り開かれます。それがいかに望まざる未来であろうと。しかしまた、より良い未来は、今・ここでの矛盾の解決の果てにしか開けません。マルクスはこうも語っています。共産主義は「次の未来の必然的形態と力動的原理ではあるが、しかし…（中略）…人間的発展のゴールー人間的社会の形態ーなのではない。』

理想通り、プランニング通りにならないのは世の常だが、人類の生存にかかわる重大な気候一生態系危機、米中対立をはじめとした冷戦再燃の危機に直面して、資本の運動に任せてその自動崩壊による望まざる未来を待つわけにもいかない。不遜ながら筆者自身の資本主義の終焉イメージとそこに至る道筋的なものを述べたいと思う。

私の資本主義の終焉イメージは、前述した資本主義の4つの本質的特徴、つまり①資本の価値増

殖の論理の貫徹、②資本蓄積による収奪、③資本一賃労働関係による搾取、④帝国主義による戦争や植民地支配が社会の支配的な、あるいは主要な特徴でなくなる社会、これらの資本主義的、あるいは階級社会的矛盾が克服された社会である。

そして、どのように資本主義を終わらせるかについて、とりあえず私が思いつくのは、3つの挟撃、つまり挟み撃ちである。

一つ目は、上部構造と下部構造の挟み撃ち。経済的社会構成体の上部構造である法制度、政治、社会意識の変革と、下部構造の経済システムの同時変革である。上部構造としては、資本主義の本質的特徴による暴走を制御する各種法制度の構築、金権政治を拒否するクリーンな政治家・政党の躍進、資本の暴走を制御する有能な官僚と腐敗のない官僚機構などが必要だろう。そして、下部構造では、資本主義的な生産様式とは異なる社会的所有に基づくあらゆる形態の経済主体、経済システムの創設が試され、資本ではなく、コモンズを増やすことが目指されるべきだと思う。

二つ目は、資本主義システムの内部からと外部からの挟み撃ち。企業の内部（経営者や労働者）からの改革と外部ステークホルダーからの改革要求。CSRやESG活動でのステークホルダーダイアログやエンゲージメントなどもこれにあたる。

そしてもうひとつは、ローカルとグローバルの挟み撃ち。例えば、国内の土地や資産の独占所有の禁止と多国籍企業の土地や資産所有の規制、企業の国内の最低賃金の引き上げ、賃金格差の是正と国際的なサプライチェーンでの処遇改善・格差是正、国内の累進課税の強化とグローバルタックスに向けての国際連携、国内の軍事費の削減と国際的な大量破壊兵器禁止と軍縮アクション。国連のSDGsへの脱成長目標、軍縮目標の設定などである。

多様な脱資本主義の革命運動が世界に日常に静かに広く深く浸透し、猛威をふるう資本主義ウィルスに破局を待たずに打ち克つことを期待したい。

## 環境俳句

循環研理事 及川陽子

昨年からのコロナ渦の中、また年を越すこととなりました。皆さまはこの一年をどのようにお過ごしになりましたか？ 私は秋号でも書きましたように、この夏は昔書いた雑文などを整理していましたが、そのことで長年自分でも納得できていない事柄に向き合うこととなり、思い悩む時間が続きました。

コロナ感染の状況が落ち着いた秋、問題を解決する糸口を見つけるために、どうしても会はなければと思う人に連絡をとりました。「忘れ物」をみつきたいと……。私のその強い思いは、相手には通じなかったようですが、私のために時間を作って下さったその人に感謝はしております。でも結局、忘れ物はみつけれませんでした。そして私は、この先もこの思いを抱えたまま生きて行くしかないのだと思う次第です。

そんな日々を過ごしてはいますが、最近ではコロナ渦で会えなかった友人や目上の方などに連絡をして積極的に会う時間を作っています。オミクロン株の出現で、この先どうなるのかわからない今、巣籠の日々がまた始まるかもしれませんから。

さて今回の俳句のイロハは季寄せ（歳時記）について。

俳句の歳時記では二月は「春」の部になっています。立春が二月四日だからということでしょうか。季節感というのは住む場所によってかなり違います。例えば東京辺りでは二月といえば寒い盛りでまだまだ冬の季節です。要するに季語の持つ共通のイメージ、季語によって想起される共通の思いが必要ということのようです。季語で自分の置かれている状況や気持ちを読むことで、人に思いを伝えることができます。

俳諧の「季寄せ」の元とされるのは北村季吟の

『山之井』（純然たる俳諧季寄の初めての書として重視される）これは短歌の季寄せ『和歌題林抄』（伝・一条兼良）を参考にしたとされています。つまり、俳諧の季題を集めるにあたって、和歌の伝統的「本意」を重んじたこととなるのでしょう。

**冬号投句** お題は「この一年に思ったこと、考えたこと、反省など」（冬の季語を使う）

俳句の講評や添削は「寺門土果」先生にお願いしております。添削は句作の折に参考にして下さい。

牛閑

おしなべて消してゆくなり除夜の鐘

評) 良いことも悪いことも区別せずに、ですね。

真新しい新年を迎えさせてくれるのが除夜の鐘という見立て。「消してゆく」のか「消えてゆく」のかで苦境がかわります。

添削) 月に日に尽きぬ迷いを除夜の鐘

去年より目に留まりたる花椿

評) コロナ禍の一年で自ずと自然に目が向くようになったということでしょうか。中七「目に留まったり」と句の流れをいったん切ると引き締まります。

久々に靴を磨くや年の暮れ

評) 巣籠りからの開放ですか。川柳風にすると、年の瀬やせつせと靴を磨きだしですね。

瑠珈

底知れぬコロナをしのぐ疑獄閣

※言いたいことは、ワクチンを打っても次々と変異株が出現し、世界的なパンデミックがいつ終息するのか見えない不安もさることながら、日本の政治状況が、財務省幹部が公文書改竄を指

示して赤木敏夫さんを自死に追い込んだ事件裁判を結局、国が突然賠償金を支払って打ち切ったり、安倍元首相の「桜を見る会」公職選挙法違反を検察審査会から「不起訴不当」と差し戻しとなっていたのを東京地検特捜部はまた、ふたたび不起訴にしたり、国家の基幹統計である建設受注データを国土交通省が勝手に二重計上していた公文書改竄事件を会計監査院は発見していたにもかかわらず、国会に正しく報告していなかったり、などなど日本国の不正、疑獄は改善の兆しなくコロナをしのぐ真っ暗闇ということを指しています。

評) 仰りたいことはよくわかります。一句で言い尽くそうとすると、苦しいですね。

添削) 政官の闇はコロナ禍より濃くて

### 爽龍

※この1年に思ったこと

#### 先見えず電波が運ぶ冬の霧

※世の中問題山積みなのに、情報化とは真実の隠ぺいと目先だけの対処・空論が飛び交うことが多く、何が大事かが分からないままに将来が見えなくなってしまうている。

評) 一度にたくさんのことを言おうとすると、逆に舌足らずになってしまいます。幾つかに主題を分ける工夫をしてみましょう。

添削) 空論の飛び交うばかり冬の霧  
見通しのきかぬ世相や冬の霧  
冬の霧SNSの無節操

※この1年の反省、残念な思い

#### 巣ごもりで馬齢を重ね冬景色

※コロナ禍で外出は自粛、自宅では何となく時間が過ぎ、残り少ない人生を無駄にした。

評) 「馬齢を重ね」は自嘲。「何となく士官を過ごした」のは自堕落。キツイ反省ですね。

厳しい風景は、冬景色というより冬木立ですが、冬の木はすでに芽を膨らませようとしていますから、希望をはらんでもいます。反省の思いを託す季語ではないようです。

添削) 手も足も縮めたままに年暮るる

ひととせをむだにかさねてきぶくれて

### 北竜

#### 行く年やデルタオリパラオミクロン

※東京五輪・パラリンピックは感動と希望をくれたし、ワクチン接種やリスク回避行動につながった面もあるかと。

評) 話題の時系列順でリズムカルな語調になりましたね。面白いです。

#### 雪ふわりマスク美人のアイメイク

※コロナ禍で美人が増えた？本当に、目元ばかり目につきます。

添削) 見てみてとマスクのひとの瞳かな  
眼差しの澄んでマスクの乙女かな

#### 冬の時化<sup>しげ</sup>軽石赤潮吹き払え

※サンゴも藻場も海が傷んでいます。

評) 結局、自然の力に頼るしかなくなるのでしょうか。或いは自然の大きな流れを乱しておいて、それに抗することが出来ると考えるのは、人類の浅はかさなののでしょうか。

添削) 軽石の右往左往や冬の時化

私(俳号 霧乃)も一句

何もせず何もせぬまゝ年暮るる

次回春号のお題は「自然環境」(春の季語を使って)投句の締め切りは3月23日。投句数の制限はありません。普段俳句に縁のない方も、ぜひ投句をお願い致します。

## 春夏秋冬

2021.12

2021 年もあっという間に過ぎてしまった。今年もコロナで始まりコロナで終わった一年間だった。もう当たり前でない日常が日常になってしまったようだ。しかしコロナ禍でも春夏秋冬、季節の移ろいは確かにあった。山と川、森と海、広大な空、そこに棲みつく様々な動物たち。豊かで活動的な大自然のもとに季節の移ろいがある。これ以上、森羅万象を話すと、だんだんボロがでそうなので、この辺で止める。要するに、自然環境は春夏秋冬で彩られると言いたいのだ。そこでコロナ前の「春夏秋冬」をパラパラと振り返ってみた。

「春」はやはり桜を題材としたのが多かった。日本人なら花見は外せない。なかでも「新入学は春がいい」をテーマとしたコラムでは、桜なくして入学式はない、と叫んだ。学びの場での国際化の波の中で、秋入学が検討されていることを憂いたのだ。「夏」と「秋」は異常気象がテーマとなったのが多い。夏らしい夏はもはや絶望的だと、かつての真っ青な空にモクモクの入道雲の下、短パン、ランニングシャツで野原を駆け巡り、小川で水遊びをした、と懐かしんだ。最近の夏の異常な猛暑は、外出さえままならない日もあり、温暖化の影響を実感することとなった。そして秋分の日を過ぎててもいつまでも暑いことにうんざりして、“暑さ寒さも彼岸まで”の言い伝えが通用しないことに憂慮した。その年の秋は猛暑で、豪雨、強風、洪水、山崩れ、あちこちで災害が多発し、おまけに何処かの国の飛翔物体が飛んできた。“カチリ/石英/秋”のイメージはもうない。「冬」は北の国から多くの渡り鳥が飛んでくる。忍池でバードウォッチングをしたコラムを書いた。野鳥の観察での初歩はカモから始まる。つい前までカモを十把一絡げにしか見ていなかったくせに、カモのなかでも様々なカモがいることを自慢気に述べている。

まあ、こうしてみると「春夏秋冬」色々バラエティーに富んだテーマ、題材で書き散らしてきた。しかし、ここ2年は「春夏秋冬」もコロナ一色で、もうウンザリだ。新たな年2022年は、かつての当たり前前の日常で春夏秋冬を迎えたい。



## 駅前のケーキ屋に列イブを知る

文/写真：風月（M）

福寿草 元日草ともいいます

循環型社会研究会（Workers Club for Eco-harmonic Renewable Society）とは

循環型社会研究会は、10年来有志で環境問題現場でのフィールドワークを中心に活動していましたが、2002年7月3日に特定非営利活動法人の法人格を取得しました。

「次世代に継承すべき自然生態系と調和した循環型社会のあり方を地球的視点から考察し、地域における市民、事業者、行政の循環型社会形成に向けた取組みの研究、支援、実践およびそのための交流を行う」ことを目的として活動しています。

循環研通信は年に4回発行しています。広く原稿を募集しています。

環境俳句の次回のお題は「自然環境」（春の季語を使って）です。次回の締切は2022年3月23日です。

循環研通信/JUNKAN No.64 2022年1月発行

発行人:久米谷 弘光（循環研代表） 編集責任者:植屋 治紀（循環研理事）

特定非営利活動法人循環型社会研究会 〒104-0031 東京都中央区京橋 3-1-1 東京スクエアガーデン 14階

株式会社ノルド内 Tel. 03-6427-9768 Fax. 03-6745-3301

E-Mail: [junkan@nord-ise.com](mailto:junkan@nord-ise.com) HP: <http://junkanken.com/>